

## 2020年度「未来起点ゼミ」の実践報告

郭麗娟・角田彩乃・佐々木泰子

お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所

### Practical Report on the Backcasting Future Visions Seminar 2020

Reiken KAKU, Ayano TSUNODA and Yasuko SASAKI

Ochanomizu University Institute for Global Leadership

#### Abstract

This is the second year of the Backcasting Future Visions Seminar, which began in 2019. This paper intends to report on the results of the class held in 2020 and present suggestions for next year's event.

In this class, students brainstorm the types of social problems that could emerge in the near future. Each student considers what measures should be undertaken in the present to avoid social problems. All classes are based on active learning and dialog. During the first semester, students will be introduced to a variety of social problems through classes taught by guest lecturers from different fields. During these classes, students will be encouraged to choose which social problems they want to examine and find effective solutions for those problems. Through dialog with themselves and others, students will become aware of their own potential to change the future. In addition, students will learn how to express themselves. Students can become more confident by improving their interpersonal skills. During the second semester, students will give presentations on their assigned projects, express their own opinions, and suggest solutions.

Next year, the Backcasting Future Visions Seminar will encourage students to form groups and work collaboratively on different social issues.

**Keywords:** Backcasting Future, Active learning, Dialog

#### はじめに

2015年9月に、国連が『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』と題する成果文書を発表した。「誰一人取り残さない」社会の実現を目指すため、文部科学省は「STI for SDGsの推進に関する基本方針」<sup>\*1</sup>を策定し、教育分野の役割を求めようとした。今後、持続可能な社会をつくるために、人材育成が必要不可欠である。このような背景のもとで、各大学は様々な実践を行うようになった<sup>\*2</sup>。2020年、新型コロナウイルスが世界中で感染を拡大している中、社会環境が激変し、教育分野も今までにない挑戦に直面するようになった。お茶の水女子大学を含め、ほとんどの大学はオンライン授業を取り入れて、新しい教育方法を模索し始めた。今回の新型コロナウイルスの状況からもたらされた様々な危機にも

反映されているように、自分、自分と他者、自分と社会の関係だけではなく、社会に対して人々が果たすべき役割は何か、今後、持続可能な社会を作っていくために、今の若者世代は何をすべきかを改めて問われるようになったと言える。

お茶の水女子大学は女性リーダーの育成を使命とし、これまでさまざまな分野で多くの女性リーダーを輩出してきた。これからも社会環境の変化にとまなない、新しい時代・社会を創造する次世代女性リーダーの育成に力を入れている。本研究は、お茶の水女子大学・株式会社ブリヂストンの社会連携講座2020年度「未来起点ゼミ（大学院では未来起点研究）」受講生へのアンケート調査結果とインタビュー調査結果<sup>\*3</sup>をまとめ、今年度の成果と課題を提示することを目的とする。

## 「未来起点ゼミ」の概要

株式会社ブリヂストンと本学は未来の女性リーダーの創出を狙い、社会連携講座「未来起点ゼミ（大学院では未来起点研究）」を2019年度より開講し、今年で2年目を迎えた。2019年度の未来起点ゼミでは対話を通して未来の社会価値を提案・創造する（イノベーション）とともに自己変容・自己超越（リーダーシップ）することを目的とし、自身との対話・他者との対話を通して、自分が生来持っている可能性に気づき、人任せにせず自ら未来を選ぶ力（オーナーシップ/リーダーシップ）の醸成を試みた。2020年度は、10年後、20年後の未来を起点とするバックキャストを軸にし、2019年度の成果を踏まえて、自己変容と日本・世界の課題を提示した上、学生同士、外部講師、教員との対話によるアクティブラーニングによって未来の社会価値を創造することを目指した。学生は多様なステークホルダーとの対話を通じて未来の社会を予測し、企業や自治体、教育機関が果たすべき役割について提言する。このような未来を起点とする考えを通して、学生のリーダーシップを育てるとともに、次世代の女性リーダーとなる学生の視点から考えた未来予測を企業や大学の活動に取り入れてもらうことを目的としている。

Table1 2020年度前期シラバス

1	5/7	ビジネスの概要と授業の進め方 ビジネスによる社会課題解決：あなたが解く社会課題	角田・郭 玉川絵里
2	5/14	話す力①「10年後に向けて知る社会×自分を伝える	竹内明日香
3	5/21	話す力②「周囲を巻き込む伝え方」・個別発表	竹内明日香
4	5/28	構造化する①「問題を構造化する」	福谷彰鴻
5	6/4	ゲスト講師と対話する①2019年度受講生から・グラレコで表現方法を広げる	本園大介
6	6/11	ゲスト講師と対話する②「内発的動機・対話がなぜ重要なのか？」	森博樹 赤井友美
7	6/18	構造化する②「2030 SDGs」	増谷真紀
8	6/25	構造化する③中間発表「私のエコシステム」	福谷彰鴻
9	7/2	ゲスト講師と対話する③「ワカモノが“ぼっち”を感じない安心できる居場所づくり」	根本真紀
10	7/9	担当教員によるQ&A	角田・郭
11	7/16	前期の振り返り	福谷彰鴻
12	7/30	前期最終発表	角田・郭

Table2 2020年度後期シラバス

1	10/1	各自のテーマ・企画の共有
2	10/15	フォーラム発表内容・グループの役割決定（対面授業）
3	10/29	テーマ進捗状況中間報告①
4	11/12	テーマ進捗状況中間報告②（対面授業）
5	11/26	アドバイザーによるアドバイス①
6	12/10	アドバイザーによるアドバイス②
7	1/14	リハーサル
8	1/21	未来起点フォーラム

2020年度の講義は前期12回、後期8回となっている。前期は社会課題の認識を深めるとともに、システム思考・グラフィックレコーディングなどの専門家を招いての講義と対話を通じ、自分が実現したい社会を描くことを目標にした。後期の目標は、2030年にありたい自分と社会の実現に向けてのエコシステムを考案し、「未来起点フォーラム」（以下、フォーラム）で提言することであった。シラバスはTable 1とTable 2を参照されたい。

2020年度前期の受講生については、附属高校生3名、学部生21名（文教育学部11名、理学部6名、生活科学部4名）、大学院生3名（ライフサイエンス専攻1名、理学専攻2名）、合計27名であった。後期の受講生については、附属高校生2名、学部生12名（文教育学部6名、理学部4名、生活科学部2名）、合計14名であった。本講義は外部講師や教員との対話によるアクティブラーニング、学年・専攻の異なる学生の対話を重視している。

## アンケート調査結果

2020年度「未来起点ゼミ」（シラバスでは「未来起点ゼミⅠ・Ⅱ」）の受講生に、これまでのリーダーシップを発揮した経験や、授業を通して学んだことについて、前期末（2020年7月30日）、後期末（2021年1月21日）に計2回、同様のアンケート調査を実施した。回答者は前期末17人、後期末14人であった。以下、2020年7月30日の調査結果を図で示しながら（2021年1月21日の調査結果は割合のみ提示する）、アンケート調査の結果をまとめる。

### これまでのリーダーシップを発揮した経験について

「あなたのこれまでのリーダーの経験は、自ら進んでであった」という質問に「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「まったく思わない」の5件法でたずねた。その結果がFigure 1である。「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせて70%を超えており、受講生の多くがこれまでに積極的にリーダーの経験を積んできたことがわかる。

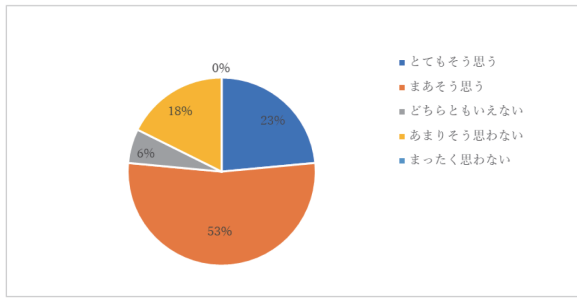


Figure1 自発的にリーダーの役割を担った経験 (N=17)

これまでのリーダーの経験から思ったこと

「あなたのこれまでのリーダーの経験は自分にとって良かった」、「人生の勉強になった」、「辛抱強くなった」などを10項目挙げて、それぞれに上記の「とてもそう思う」から「まったく思わない」の5件法で回答してもらった。その結果は Figure 2 である。

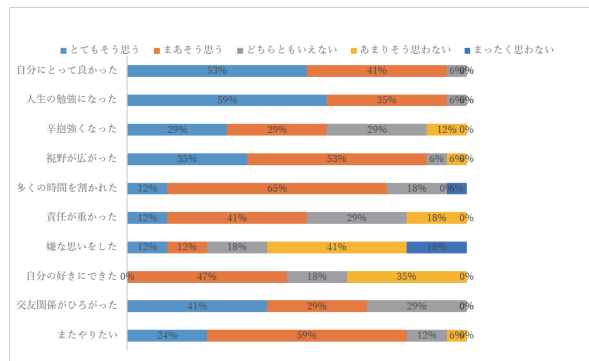


Figure2 これまでのリーダーの経験から (N=17)

「自分にとって良かった」、「人生の勉強になった」は「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると前期末94%（後期末100%）という結果であった。また「視野が広がった」は前期末88%（後期末93%）という結果であり、リーダーの経験を前向きに受け止めていることがうかがえる。一方で、「多くの時間を割かれた」は前期末77%（後期末86%）であり、前期より後期のほうがフォーラムの準備により多くの時間を費やしたことも原因かもしれない。また、「責任が重かった」は前期末53%（後期末79%）といった回答もあり、リーダーとして苦労した経験もあったようである。特に、後期は受講生が主体となってフォーラムの開催に向けて役割分担で準備を進めていたこともあり、各自何をいつまでやるのか、他の学生とどのように作業を分担するのかについての話し合いが多かった。このような話し合いや調整のプロセスにおいて、リーダーシップの力が育成されているように感じる。それでも「またやりたい」という

回答は「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせて前期末83%（後期末86%）であり、リーダーの経験について、前向きにとらえようとする姿勢がうかがえる。

社会人になって何かのリーダーになりたいか

将来、何かのリーダーになる希望があるかを尋ねた。「社会人になって何かの組織やグループのリーダーになりたいですか」の問いに上記の「とてもそう思う」から「まったく思わない」までの5件法でたずねた。結果は Figure 3 である。「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると前期末76%（後期末100%）であった。将来、社会人になってからリーダーとして活躍したいと考える学生の意欲がみられる。「未来起点ゼミ」は次世代女性リーダーの育成の一環として開講された講義であり、この結果からもわかるように、本講義の一つの目標が特に後期において達成されたのではないかと考える。

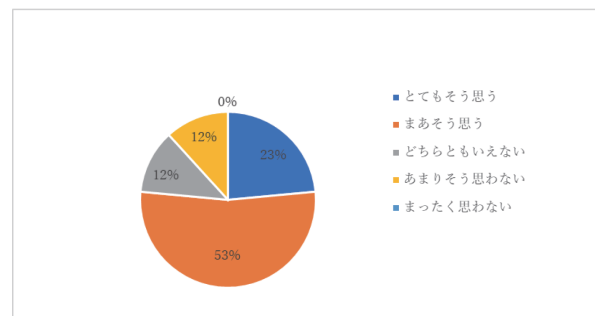


Figure3 社会人になって何かの組織やグループのリーダーにいずれなりたいですか? (N=17)

希望するライフコース

希望するライフコースについての考えはどのようになっているのだろうか。これについて、見てみよう。「あなたが将来希望するライフコースはどれですか」という質問に、「専業主婦コース」「再就職コース」「両立コース」「DINKSコース」「非婚就業コース」の選択肢から選んでもらった。結果は Figure 4 である。「非婚就業コース」と「両立コース」を合わせて、就労継続希望は88%であり、ほぼ9割に達している。また、後期末の調査では、「非婚就業コース」と「DINKSコース」はそれぞれ14%と29%であり、将来、子どもを持たず、就労を継続する意向が強いことがわかる。さらに、「両立コース」は57%であった。よって、8割以上は働くことと家庭の両立をしていきたい考えを示し、働くことが将来のライフコースの中で大きな比重を占めていることが分かる。

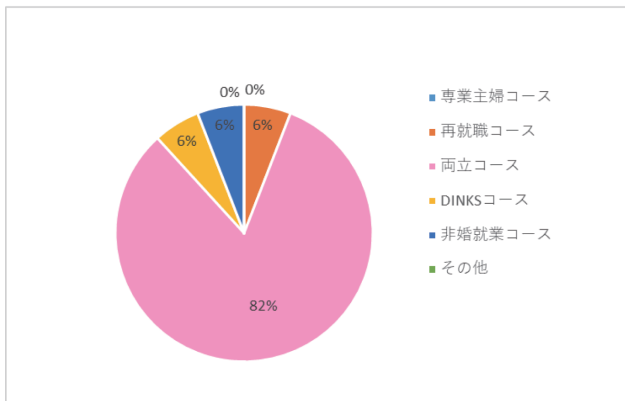


Figure4 将来希望するライフコース (N=17)

### キャリアを考えるヒント

「自分のキャリアを考えるヒントになった人はいまですか」という問いに10の選択肢の中から選んでもらった(複数回答可)。結果がFigure 5である。その他もあるが、「母親」24%(後期末21%)、「女性教員」21%(後期末17%)、「姉」3%(後期末7%)のように、同性の先輩からヒントを得ていることがわかる。キャリアを考える上で、身近な女性はロールモデルになっているようである。

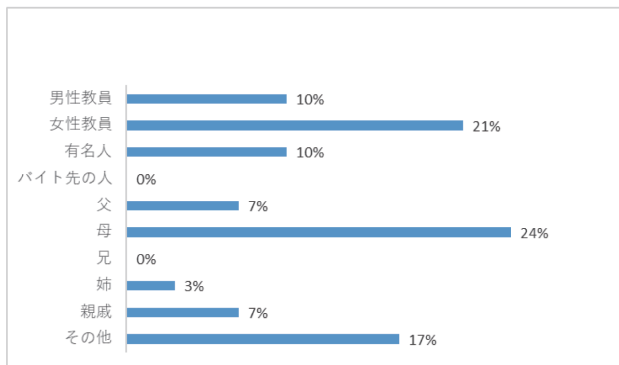


Figure5 自分のキャリアを考えるヒントになった人 (N=17、複数回答可)

### 昇進希望

「将来はどの役職までつくことを考えていますか」の問いについてはFigure 6に示したとおりである。「役職なし」という回答が0%であったが(後期末0%)、「役員・経営者クラス」希望が12%(後期末14%)であった。「本部長」は12%(後期末0%)、「部長」は12%(後期末29%)、課長は0%(後期末0%)であった。管理職になることを希望している受講生は前期3割以上、後期4割以上いることがわかった。一方で、「考えたことがない」という回答が64%(後期末57%)であった。受講生の多くは大

学1年生、2年生であり、年齢も若く、将来の役職についてまだ考えていない人が多数いることが分かった。これについて、「未来起点ゼミ」は様々な職種の外部講師を招き、講義をしてもらうことで、学生に早いうちに、職業や社会について考える機会を提供している点は、非常に意味のある取り組みだと言える。

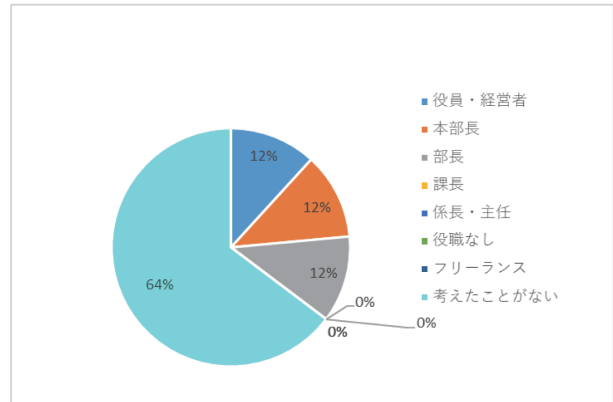


Figure6 将来はどのような役職までつくことを考えていますか? (N=17)

### 2020年度「未来起点ゼミ」を受講しての意識変化

未来起点ゼミを受講してどう思っているか質問した。前期末の回答結果はFigure 7である。

前期末、「とてもあてはまる」の回答が多かったものは、「未来について具体的に考えるようになった」と「自分とは違う価値観に気づいた」がそれぞれ71%であった。多くの受講生は自分の未来について具体的に考えられるようになっただけでなく、様々な分野で活躍されている外部講師の方との対話や他の受講生との意見交換により、多様な価値観があることに気づいたようである。また、後期末、「とてもあてはまる」の回答がもっとも多かったのは「自分とは違う価値観に気づいた」(86%)であった。「未来起点ゼミ」では、高校生から大学院生(後期は高校生から大学3年生)まで、異なる学年や異なる専攻の受講生が一緒に対話をしたり、また、数人でグループを作り、それぞれのテーマについて意見交換をしたり、発表したりというアクティブラーニングの手法を用いている。また、講義では、担当教員、外部講師とブリヂストンの社員との交流機会も設けられている。さらに、後期では、フォーラムの運営の役割を受講生全員で分担し、進めてもらうようにした。これらの経験を通して、受講生たちは多様な立場にいる人の存在と多様な価値観に気づいたと考えられる。

前期末、次に多かったのは「自分の思ったことを発言した」と「自ら他者とコミュニケーションをとった」



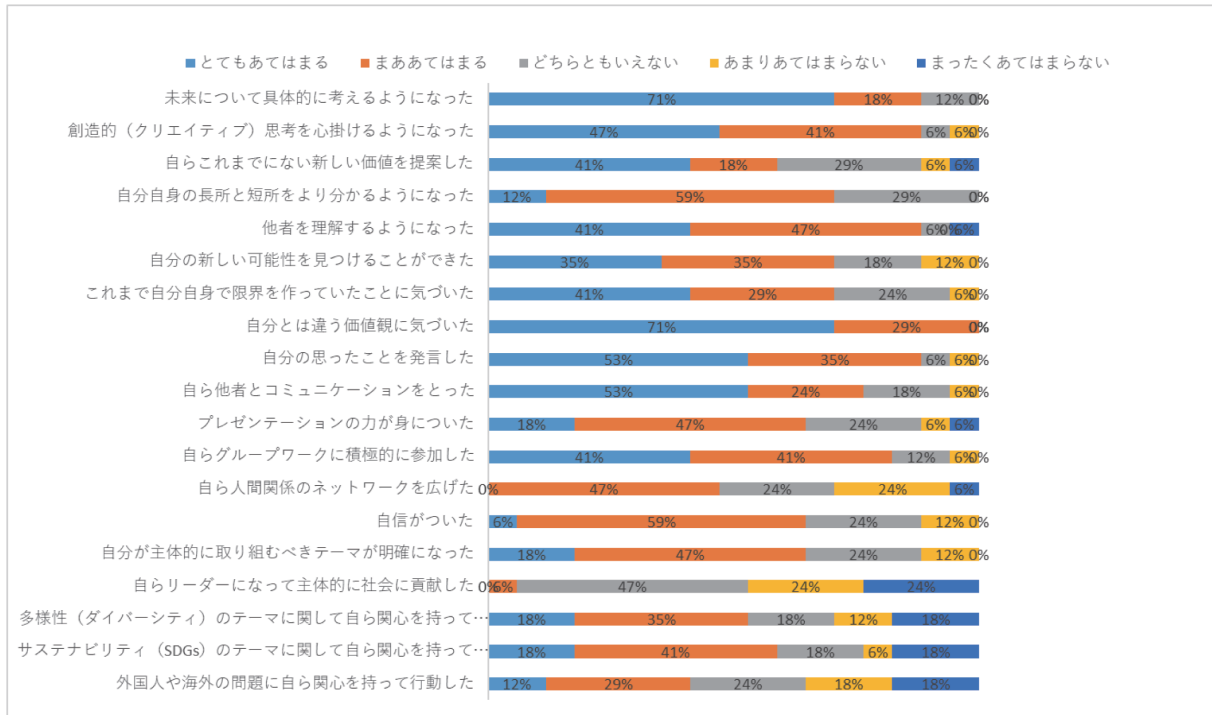


Figure7 未来起点ゼミを受講して(N=17)

であり、それぞれの問いに「とてもあてはまる」という回答が53%であった。未来起点ゼミでは、自分の意見を発言すること、また他者との対話を通して新たな気づきを得てもらうことを目指している。この2項目の回答結果から、前期の授業を通して、受講生は自分の思いを発言でき、また、他者とコミュニケーションをする大切さに気付いたと言える。

それに対して後期末、次に多かったのは「他者を理解するようになった」であり、「とてもあてはまる」は79%であった。毎回の講義の冒頭で授業ルールの一つである「意見の違いは保留」をスライドで見せるようにしている。このルールのもとで講義が行われていることもあり、受講生は様々な価値観や考え方を受け入れ、他者を理解するようになったのではないかと考えられる。また、後期末、「多様性のテーマに関して自ら関心を持った」、「サステナビリティのテーマに関して自ら関心を持った」について、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計はそれぞれ100%（前期末53%）と72%（前期末59%）である。後期では、他の受講生の発表を聞く機会が非常に多かった。また、発表テーマ自体はサステナビリティに関する内容が多く、このような結果が得られたと考える。他に、後期末、「未来について具体的に考えるようになった」、「創造的思考を心掛けるように

なった」と「自分の思ったことを発言した」の回答はどちらも71%であった。1年間の講義を通して、受講生は自分の未来について具体的に考えられるようになっただけでなく、自分の創造的な思考を心掛けるようになり、また、他人の前で自分の思ったことを発言できるようになったのである。「自分自身の長所と短所をより分かるようになった」、「自ら他者とコミュニケーションをとった」という問いについて、「とてもあてはまる」、「まああてはまる」という回答を合わせると、93%であった。これは未来起点ゼミで狙っていた、「講義を通して、自分自身のことをより分かる」という目標を達成したと考える。

一方で課題も見えてきた。前期末、「自らリーダーとなって主体的に社会に貢献した」、「自信がついた」はそれぞれ「とてもあてはまる」が0%、6%と他の項目と比較しても低い。また、「外国人や海外の問題に自ら関心を持って行動した」について、「とてもあてはまる」が12%である。後期末、「自らリーダーとなって主体的に社会に貢献した」について、「とてもあてはまる」が7%であり、「外国人や海外の問題に自ら関心を持って行動した」について、「とてもあてはまる」が14%である。社会への貢献、または海外の問題に関心を持って行動することができなかつたようである。これについては、次年度の課題としたい。

## 社会課題の認識の変化

後期は、「未来起点ゼミを1年間受講して、自身の社会課題の認識が高まった」という項目を追加した。結果はFigure 8にまとめた。これについて、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると100%であった。1年間の受講を通して、受講生は自分の周りの社会課題についてかなり意識するようになったと言える。

### インタビュー調査結果

2020年度、「未来起点ゼミⅢ・Ⅳ」を開講し、2019年度の受講生3名が引き続き受講した。本講義の主な目的は、2019年度未来起点ゼミでの自己の提言内容を実践するとともに、2020年度未来起点ゼミの支援を通してリーダーシップ力を高めることであった。年間を通して、基本的に隔週月曜日に定例会または勉強会を行った。定例会では、2020年度未来起点ゼミのサポートについて打ち合わせをしたり、各自のテーマにおけるイベント実施などの進捗状況を共有してもらったりしていた。勉強会では、受講生の希望をもとに、前期、協会ビジネス及びトークンエコノミーをテーマとして外部講師に講義をもらった。後期はお互いの活動の状況をもっと知りたいという希望に基づき、3人に各自のプロジェクトの進捗状況を共有し、情報交換をもらった。当初は定例会も教員側から問いかけをするような形で進めていたが、学生同士でお互いの活動状況を知りたいという希望があり、ファシリテーションも任せた。そのうち、

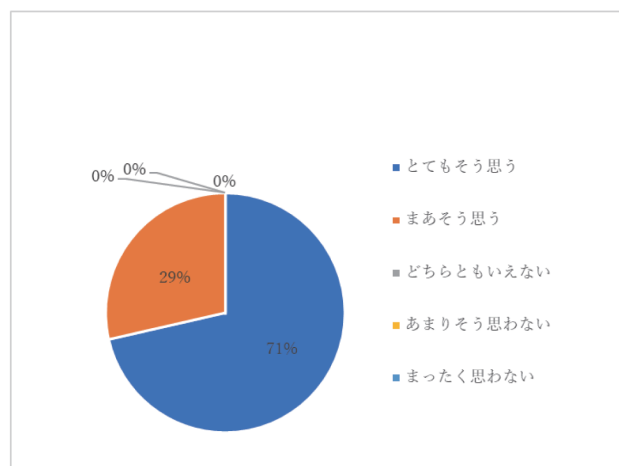


Figure8 未来起点ゼミを1年間受講して自身の社会課題の認識が高まった (N=14)

受講生たちは段々と話を進めるようになり、2020年度の未来起点ゼミへのサポート内容についても、積極的に提案するようになった。

前期の最終日、上記の3名も自分のテーマの進捗状況について発表した。後期は、学生の希望から、フォーラムで発表するという形ではなく、成果報告の形で最終レポートを作成してもらった。

2020年度では、上記の3名の受講生を対象に、2年目の受講を通して、意識にどのような変化があったのかについて、2020年8月にインタビュー調査<sup>4</sup>を実施した。以下、3名の学生のインタビュー調査の結果を提示する。

### 自分自身の変化について

自分自身の変化について、以下の回答があった。

- ・2019年度の未来起点フォーラムで発表して、そこから行動に移すことのイメージができずにいたが、Ⅲを受講して、実際に自分で何か一つ作ってアウトプットするという経験をしたことで、自信というか、最初の一步を踏み出すことができたので、これから色んなことにチャレンジして行動していこうという意欲は、2019年よりも強くなっていると思う。
- ・どの業種に就くか決まっていなかったが、フォーラム発表後、漠然と農業や食糧に興味があると思い始めた。2020年になってから、〇〇(会社名)の△△さん(個人名)と繋がりができて、自分の好きなものが色々と見えてきた。一つだけでなく、色んな所属があっても良いと思うし、起業という選択肢も無くないと思った。マーケティングについて現在、学んでいる。
- ・大きく変化したのはあまりないと思うが、多少は将来を具体的に考えようという気にはなっている。

上記の回答では、「大きく変化したのはあまりないと思う」一方で、将来を具体的に考えるようになったという声がみられた。また、2020年度では、自分のプロジェクトを実践することによって、自信や意欲は「2019年よりも強くなっている」と大きな変化を語った受講生もいる。さらに、外部講師とのつながりにより、自分自身の職業についてヒントを得ているという回答もあった。このように、2年目の「未来起点ゼミ」の受講により、自分自身の変化が個人の差はあれ、確実にあったと考えられる。

### 2019年と比べて今の自分について

「2019年と比べて、今の自分をどのように評価

しますか？なぜですか？将来、どのような姿でありたいですか？なぜですか？」という質問を投げたところ、下記の回答があった。

・頑張っていないと思う。コロナの影響で、人と接することが少ないと感じている。色々な周りの人と話して刺激を受けて、頑張ろうと思えることが多かったの、そういう機会があまりない。社会の問題を考えたり、イベントに参加したりする心の余裕あまりがなかった。ストレス的なものかもしれないけれど、昨年に比べて頑張れなかったと感じている。

・2019年度の受講前と比べたら、よく勉強してるように思う。吸収しようとする姿勢というか、学びたいという意欲が増えた。Ⅲを取る前と比べたら、ワークショップを作ったり、他のところでも、未来起点ゼミでできた人脈がきっかけで、ファシリテーションのお手伝いをさせていただいたりしたので、徐々に行動で示せる人への第一歩を踏み出しつつあると思う。

・大きく成長したと評価する。

コロナウイルスの影響により、人と接する機会が激減している中、精神面で大きな影響を受けている受講生がいるようである。一方、2年目の受講で、学びたいという意欲が増す受講生もいる。特に、自分でワークショップをつくったり、積極的に行動しようとする姿勢がみられた。

#### 職業キャリア意識の変化について

「未来起点ゼミ」を受講して、職業キャリア意識がどのように変化したのだろうか。これを見てみよう。

・外部ゲストも影響があったが、特に周囲の受講生が刺激になった。Ⅰ・Ⅱの受講生の興味関心を知って、そういう社会問題もあるんだなと思ったりもするし、2人が具体的にキャリア形成を考えているのを聞いて、私もやらないといけないという気持ちになった。

・「農業や食」に関連してイベントを企画・運営。外部講師と関わらせていただいて自分や仲間のやりたいことをできる「場」を持つことの重要性を実感した。

上記の回答から、他の受講生の影響を受け、自分もキャリア形成を考えないといけないという意識の変化や、また、外部講師と関わる中で、自分のやりたい事を実現する「場」の重要性に気づいた受講生がいることがわかる。ここの「場」については具体的に言及されていないが、将来の「就職先」という意味合いが含まれているのではないかと予測できる。これについて、「未来起点ゼミ」は学生にとって、将来の職業や就職先を考える切っ掛けの講義として、重要な意味がある

のではないだろうか。

#### 自分自身のリーダーシップについて

「未来起点ゼミ」は次世代女性リーダーの育成を目標としている。2年目の受講により、3名の学生は自分自身のリーダーシップについて、どのように捉えているのだろうか。これについて、「自分自身のリーダーシップについて、どのように考えていますか」と尋ねた。「みんなを引っ張っていくタイプのリーダーにはなれない」、「人の前に立って先導してやっていくのはあまり得意ではない」、「リーダーよりは副リーダーが向いている」の回答があった。これらの回答から分かるように、3名の学生は、どちらかという、リーダーを支える、サポートする側に自分が向いているとの意識が見て取れる。

また、「未来起点ゼミを受講したことは、自分自身のリーダーシップを考えるうえで役に立つと思いますか？なぜそのように思いますか？」について、「学び続ける姿勢はリーダーシップを成長させるのに重要だと思うが、未来起点ゼミをきっかけに、学び続ける姿勢も得られた」と回答されたように、学び続けることはリーダーシップの重要な要素であることが強調されていた。

#### 成果

##### 自己の軸 / 内発的動機

「未来起点ゼミ」は内発的動機からテーマを選定することを大事にしている。そもそも自分が何をやりたいのか、何に興味関心を持っているかをストレートに問われた経験がない学生が多く、前期の当初では戸惑いも多くあった。言われたことや期待されていることに反応ばかりしていると、自分の気持ちへのアクセスが鈍化してしまう。まずこれを活性化する必要がある。他者との違いの発見、多様な考え方が存在すること、そこに良し悪しの評価はないということを実感して初めて自己の軸と向き合えることも多い。そこで、相互に傾聴の姿勢が必要不可欠となる。授業の冒頭で毎回「一人ずつ話しましょう」「意見の違いは保留する」と説明しているのはこのためである。

昨年度は、自己開示のスタートが遅かったのか、後期のフォーラム直前まで自分のやりたいことが見つからない学生も何人かいたが、今年度はフォーラムの時点では、程度の差はさておき、全員は自己の軸 / 内発的動機と向き合うことができた。これは一つの成果と



言える。これについては、前期で外部講師による「内発的動機」の講義がきっかけになったと考える。また、フォーラムの参加者から、「皆さんの発表がそれぞれ自分事として捉えられていることがよかった」というコメントからもわかるように、「内発的動機」に基づく発表ができたと言える。

## 対話

「対話」は本講義のベースである。振り返りシートの中でも「対話(Dialog)という言葉は初めて聞いた」「対話と議論の違いを理解するのが難しかった」という学生も何名かおり、今まで自分がしてきた(求められてきた)のは討論であったという学生もいた。前期の外部講師による「対話」の講義では、Discussion/ 討論は結論としてAかBの意見の是非の評価判断を伴うもの(A or B)であるのに対し、Dialog/ 対話はAとBの意見の評価判断をせず、AとBの意見を違いとして受け入れ、Cという結論を創造する(A and B → C)という定義づけをした。この回以降、本講義において他の受講生の話を聞く意義がより明確になったのではないかと推察する。振り返りシートの「対話をすることで本当に発信したいことがようやく見えてくるのだと気づいた」というコメントにもそのことが表れている。

## 社会課題 / 社会とのつながり

社会課題の認識は、「自己の軸 / 内発的動機」と並ぶ本講義当初からのテーマである。もっともこの二つは、一足飛びにはつながらない。両者のインプット・アウトプットを並行しつつ、最終的には統合していくようなカリキュラムとした。

昨年度は、社会課題がどのように自分と関わっているか、また、社会とのつながりの認識に至るまで時間がかかる、あるいはそこに至らない学生もいた。そこで、今年度は早めに社会課題について触れる機会を設け、第1回から外部講師による社会課題の講義とワークを取り入れた。第2回と第3回のテーマはプレゼン・表現であったが、社会課題についても触れていた。また、第3回では「好き×未来の可能性」または「社会で気になることに挑戦」というテーマで、学生にミニ発表をしてもらった。自分の興味のある社会課題について思いを馳せ自分にできることを発表し、講師や他の受講生からフィードバックをもらうことで、社会とのつながりを改めて認識し、小さな一歩でも自分ができることがあると感じたことは、その後の社会課題に向き合う受講生の姿勢に影響を与えたと考える。

前期の最初の頃、「社会課題は自分の外にあるものであり、自分が何かできるとは思わなかった」という学生が多くいた。ところが、フォーラム後に振り返りシートで社会課題について「自分にもできることがあり、実行していきたいと思うようになった」と、認識の変化を述べる学生が複数いたことは、今年度の成果と考える。

## 共創

昨年度、個人発表にするか、グループ発表にするかは学生に任せた。最終的に、全員個人発表を選択しグループ発表はなかった。結果として受講生同士の横のつながりができにくくなっていた。今年度は、3人グループ発表が1つ、2人グループ発表が1つあった。その中の1名がフォーラムで得たものについて、「グループ発表の大変さ、自分の意見をもつことの難しさ、人を動かすことの難しさ」を端的に述べていた。これらの大変な経験がリーダーシップの実践でもあり、ゼミを通じて得てもらいたいものでもある。来年度はよりグループでの発表への挑戦を後押しする仕掛けをしたい。

課外の横のつながりのきっかけとして、受講生用にSlackの活用を試みた。SDGsや受講生のテーマに関するイベント等の紹介、受講生同士での情報交換、イベントのサポートのお願いなど、受講生同士で自由にやり取りをしていた。また、後期のフォーラム運営の際の連絡用プラットフォームにしてもらった。SlackはゼミⅢ・Ⅳの学生からも積極的に発信し、使い方等の解説を授業で行ったが、当初は一部の受講生のみ利用していた。フォーラムが近づくにつれ、運営のための全体やグループをまたぐ連絡に利用され始めると、活発にやり取りが行われ、また、フォーラム運営への学生の関わりが可視化される副次的効果もあった。Slackは次年度にも引継ぎ、修了生を含めた「未来起点ゼミ」コミュニティとして活用していきたい。

## リーダーシップ

リーダーシップについては、特に講義の回を設けず、グループ発表の検討やフォーラム運営における受講生同士の関わりの中で自己のスタイルを模索してもらった実践を重視した。振り返りシートでは、特定のメンバーにフォーラム運営への貢献について感謝のコメントが多かった。リーダーシップとは何か、それは教員から教えられるより、フォーラム運営に積極的に貢献した受講生の行動がより説得的であった。



## プレゼンテーション

社会とのつながりの中で自己実現をしていくには他者に向けてプレゼンすることが不可欠である。本講義では、プレゼン及び表現方法の一つであるグラフィックレコーディング(グラレコ)の入門説明の講義を取り入れた。プレゼンの講義では、スキルより自分のやりたいことへの情熱を表現することの大切さを学んでもらい、これはプレゼンの土台となった。

なお、フォーラムの発表での質疑応答等、参加者とのやり取りについてはチャットでの質問等も拾っている学生、あまり活用できていない学生などばらつきがあった。質問への誘導や拾い方の工夫等を含め、進め方/ファシリテーションは今後改善していきたい。

## 自己肯定感・自己効力感

学生の振り返りから、プレゼン力に自信がついたとのコメントがあった。当初からプレゼンが好きという学生もいたが、苦手な学生も多くいた。前期には3回のプレゼンを行い、後期も外部アドバイザーからコメントをもらう機会を2回設け、リハーサル、フォーラム本番まで、ほぼ毎回何らかの形で発表を行った。これらを通じて、自己の考えを他者に示すこと、そしてそのフィードバックに手応えを感じられたことが自信と自己肯定感につながり、プレゼンへの抵抗感が薄れていった。

本講義ではプレゼンの技術の講義は行っていない(フォーラム直前の任意の勉強会を除く)。プレゼンへの苦手意識は、実は自分の思いがとるに足らないのではとの考え、表に出すことが自分勝手であるとの思い込み、否定されることへの恐怖などの気持ちの面が大きいようである。前期第3回授業の学生のプレゼンに対する外部講師の熱のこもったコメントにより、まずは自分の思いや考えを周りに表現していいんだということ、それにより周りを変えられるかもしれないという感覚を得たことをきっかけに、プレゼンを重ね周りの学生や外部アドバイザーの期待以上の温かい反応を得ることで、心理面でのバリアを段階的に払拭していったように思われる。

## ワークショップ

本講義はワークショップ形式を多用している。講義形式の部分はあるけれども、それをもとに学生同士の対話を行い、そこから学生同士で学びあうことを根幹としている。これには、他者との違いを理解することも含

まれている。人と違うことを発言することへの抵抗感をなくすため、「否定しない」「人の話を聞く」を徹底して伝え、受講生に自然に浸透していったと思われる。

## ピアラーニング

何を学ぶかは勿論であるが、誰と学ぶかも重要である。本講義では、授業にコミットしている多様なバックグラウンドの学生同士で対話し、教えられるのではなく、自ら考え学ぶことを目的としている。教員の役割は正解を教えるのではなく、対話の場作りと問いかけである。学生の振り返りシートを見る限り、毎回それぞれの新たな気づきが生き生きと自分の言葉でつづられており、「このゼミが一番楽しい」というコメントもあり、大きな成果が得られたと考える。

## 心理的安全性

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大という特殊な状況下、後期の2回を除き全てオンライン授業という、教員も学生も今までに体験したことのない授業形式となったが、対話の心理的安全性を確保するため、学生にできる限りの配慮をした。Zoomの負荷の考慮などもすべきではあるものの、毎回の授業ではビデオオンでの参加を求めた。このような比較的少人数で対話重視の本講義では、どのような人がどのような表情で聞いているのかがわからない中で自己開示を求めるとも困難であることは容易に想像できる。これは本講義の多くを構成する大学に入学したてで友人もいない1年生にとってはなおさらである。そこで、Zoom機能によるチャットや冒頭のチェックイン、複数回の少人数のグループワークにおけるブレイクアウトルームの活用を初回から積極的に行い、学生同士の密度の高い対話の時間を多く設けた。その結果、初期の振り返りシートでは、「どんな人が授業を受けているかがわかり、安心した」というコメントが多く、心理的安全性を確保するという場づくりはある程度できたと考える。

上記の成果はもちろん、1年間の受講を通して、14名の学生はそれぞれ自分のテーマについて調べたり、実際インタビュー調査を行ったり、最終的に、1年間の集大成を発表した(Table 3を参照)。発表内容は教育、食、スポーツ、ファッション、情報社会、文学、動物愛護など多岐にわたっており、未来の社会を自分の力でよりよくしていくための学生のアイデアと提案がなされた。発表を通して、学生は自分の問題関心を明確に意識し、自分の意見を他人の前で堂々と述べたこと、そしてそれが本人の自信につながった

ことが一番の成果と言える。

Table3 2020年度「未来起点フォーラム」発表タイトル

テーマ名
「ありのままの自分」になる勇氣～コロナ禍、ひとりぼっちになって初めて見えてきたもの～
社会を変えたい！その熱意を形にできるシステムを～シリコンバレーに魅せられて～
Sustainable Fashion Project～消費者の意識に革命を起す～
もしも学校に植物工場ができれば～都市農業の実現を目指して～
孤食に対する強すぎる問題意識を解消し、楽しみ方の一つ～共食と孤食の共存を目指して～
「禅啓、デジタル社会の皆さんへ」～気軽に会えなくなった今こそ画面越しに温もりを届けよう～
「食べる」で幸せの輪を広げる～フェアトレードを身近にするための提案～
スポーツ好きな子どもを増やし、身体も心も健康な社会に～みんなで楽しい「新しい体育」をつくろう！～
日本の少女漫画っておかしくないですか？～soft feminismを通して、多様な女性を語り、女の子の文学を生み出そう～

### 今後の課題

以上をみてきたように、2年目の「未来起点ゼミ」は多くの成果を得られたと言える。一方で、従来の主流となっている一斉講義（館野，2008）とは新しいスタイルの講義として、多くの課題もあった。とりわけ、新型コロナウイルスの影響により、2020年度の教育現場が大きく変わり、これまでにないオンライン授業を実施することになり、多くの困難に遭遇することもあった。具体的な課題については下記のとおりである。

### オンライン対面併用授業

今年度はZoom授業となったため、準備を入念に行った。ブレイクアウトなど多用したがトラブルはほぼなかった。一方、後期の対面授業の回のZoom併用は、Zoom参加者と教室参加者相互の声が届きにくく、プレゼン資料の切替がうまくできなかった。今後、少ないスタッフ人数でできることを模索していきたい。

### 「未来起点フォーラム」の運営

運営の負担が一部の受講生に偏ってしまっていた。これはある程度仕方がないが、役割分担の見える化などを工夫できるように思えた。フォーラムの進行は、発表での質疑応答を促したり参加のチャットの質問等も拾ったりしているグループ、これらがあまり活用できていないグループなど、グループによりばらつきがあった。質問への誘導や拾い方の工夫等を含め、進め方/ファシリテーションは今後改善していきたい。今年度の振り返りシートのコメントやSlackのやり取りを次年度に引き継ぎたいと考えている。また、フォーラムのアンケート回答率(15名/46名)が低い。これは、周知の仕方に課題があった。フォーラム直後にアンケート依頼メールを送るなど、来年度は工夫をした

い。

### 共創

今年度は、個人発表となったとしても他の受講生との共創が起きやすい仕組みとして、後期にバディ制度を取り入れた。これは、発表/運営グループのメンバーとは別にペアを作り、自主的にお互いの発表テーマについて話したり調査などを手伝ったりするための相互サポートを期待したものである。しかしながら、目的を伝えただけでは自然発生的に相互の関わり合いは起こらず、次年度はグループ発表を基本とするなど、プログラムの工夫も必要と感じた。

### 時間

前期は外部講師の講義と学生の対話の時間を取ったため、時間を延長することもあったが、学生の対話時間が十分とは言えなかった。プログラム構成は時間管理を含め、次年度はより工夫していきたい。

### 振り返りシート

殆どの学生が毎回欠かさず提出したが、一部未提出の学生もいる。気づきを言語化することで新たな気づきが更に得られたり、考えが客観的に整理できたりする。毎回の授業を内省しやすいような設問を置いており、受講と両輪でうまく利用してもらえるよう、学生にその趣旨を伝えていきたい。

次年度は、上記の課題を念頭に入れながら、よりよい実践をおこなっていきたい。

### 注

- \*1 STI for SDGsの取組が、STIのあり方自身に変革を迫る契機であることを踏まえ、創造的・革新的技術シーズの創出とバックキャスト・デザイン思考の効果的な組み合わせ、多様な専門家が分野等を超えても結集して新たなアイデアの創出を促進する仕組み、各セクターを越境し繋ぐ人材の育成等が必要であるという視点を持って具体的取組を推進する。
- \*2 例えば、慶応義塾大学、金沢工業大学、北九州市立大学、東京大学、京都大学、関西大学などがある。
- \*3 2回のアンケート調査と1回のインタビュー調査は全てお茶の水女子大学倫理委員会の承認を得ている。インタビュー調査については、教員は事前に「調査協力依頼」をPloneとMoodleにアップし、了承を得るようにしていた。1回目の調査については、受講生にインタビュー調査アンケート用紙を学生の大学

のメールアドレスに送付し、回答してもらってから、「未来起点ゼミ」のアカデミック・アシスタント（以下AA）に送付してもらった。AAはその後、調査結果の整理・集計を行った。2回目の調査については、教員がGoogleアンケートを使用した。すべてのアンケート調査は匿名の形で行った。

- \*4 インタビュー調査については、「未来起点ゼミ」のAAに依頼し実施してもらった。具体的には、2020年8月6日の13時から14時まで、17時30分から18時30分まで、8月27日の18時から19時まで、3回を分けて、それぞれの3人の受講生にインタビュー調査をZoomで実施してもらった。調査の前に、教員は事前にAAに調査内容を伝えた上で、インタビュー調査における注意点を説明し、指導を行った。調査実施後、AAは学生の個人名が特定さ

れないような形で、インタビュー調査結果を整理し、教員にメールで送信した。本稿で提示しているインタビューの調査結果はその一部である。

#### 参考文献

- 館野泰一（2018）「第1章これからのリーダーシップとその教育方法」館野泰一・高橋俊之編著『リーダーシップ教育のフロンティア 実践編』北小路書房：pp. 36-54.
- 山口周（2019）『ニュータイプの時代』ダイヤモンド社.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/kokusai/sdgs/\\_icsFiles/afiedfile/2018/12/21/14087\\_37\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kokusai/sdgs/_icsFiles/afiedfile/2018/12/21/14087_37_001.pdf)

2021年2月15日 受稿